

例えば「人は誰しも無意識下で各々原風景を心の中に描いている」と仮定してみたとき、それらはどのような様相を呈しているのでしょうか。

私たちを取り巻く世界は無限大に広がり、このあてどない空間の中に己を見出すとき、何を拠り所にすればよいのか不安に駆られることもあるだろう。木下恵介にとり、このおよそ10年間にわたりそばに寄り添い、また自らの居場所となったのが、多摩川である。

春夏秋冬と季節が巡るにつれて表情が変化する豊かな生態系を有し、またその植生も多様性に富んだこの河川敷では、無数の小さな生命体がひとつひとつ着実にその命を育んでいる。人々のかけがえのない存在でもあるこの川や周囲の風景は、そのままごく自然にずっと木下の無意識下を通り過ぎるとともに、その意識下でしっかりととらえられ、継続して制作の基盤となり作家を支えていた。

あるときは緻密な線描で対象を描き、またあるときは大胆にその特徴を切り出して表現する。そしてまた、個体ごとに樹形の個性をとらえ、丁寧に描く。これら如何なる場合においても、その成果は対象へと向けられた真摯な観察眼に裏付けられたものである。さらに、これまで木下が培ってきた、線描を中心としたリズムやバランスの感覚が見事に調和し、手法は異なってもここに独自の一体感を創出している。

また、これら多摩川のシリーズでは、敢えて黒のインクのみを用いることで、植物の魅力的な形態がくっきりと浮かび上がり、背景となる紙の色や質感との対比と相まって、より奥行きのある印象的な世界が生み出されているのである。

冒頭の仮定が正しいとしたとき、私たちの無意識下の原風景は、木下が描くような身近にある何気ない普遍的風景なのかもしれない。

木下は来春より生活の拠点をこの多摩川から遠くに移すことが決まっている。この川とのおよそ10年間にわたる交錯を振り返り、過去のそれぞれ異なる感覚や時の流れの中で制作された作品を一度に合わせて提示することで、今回また新たな発見が生まれることであろう。

そして、本展は大きな節目として、木下の新しい門出を記念する場となるであろう。

杉山はるか（すぎやま・はるか） / 愛媛県美術館 専門学芸員